

## 農民の賃労働者化と農民教育の課題（その1）

神 田 嘉 延

### Conversion of Peasants into Proletariats and the Problem of Peasants Education (Part I)

Yosinobu KANDA

#### 序 章

第一節 農民の貧困化と生活学習

第二節 農民の賃労働者化と農村住民自治の形成

#### 第一章 農民の賃労働者化と安全衛生教育

——出稼ぎにおける人身事故問題を中心にして——

第一節 出稼ぎの人身事故の原因別類型

第二節 出稼ぎの不安定就労性と人身事故

第三節 健康障害者、高齢者の出稼ぎと人身事故

第四節 安全衛生教育体系と出稼ぎ

### < は じ め に >

本研究は、農民の賃労働者化によって生じる農民教育の課題を明らかにするものである。

この農民の賃労働者化は、いわゆる「高度経済成長」＝強蓄積下の積極的労働力政策によって、農家労働力が資本に包摂されていく過程を問題にしている。

この農民の賃労働者化は、不安定な労働力市場を広範囲に作りあげ、農村における相対的過剰人口の層を拡大している。そこでは、労働強化、危険な作業等々の無権利状況での高額収入を見込んでの就労である。この無権利状況での就労は、賃金不払い、人身事故を生みやすい。賃金不払い、人身事故は、行方不明などのルンペンプロレタリアート層への流入の可能性を多くもっている。

本稿で論述する農民教育の課題は、農民の賃労働者化による全生活過程の実態を基礎にしている。農民の全生活過程の実態を明らかにする方法は、農民の貧困化論である。現段階の農民の貧困化論は、国家独占資本の市場編成、農民層分解、労働力市場によって、農民の全生活過程を明らかにすることである。

本稿においては、農民の貧困化によって生じる学習課題を生活学習として提起する。

農民の賃労働者化には、二つの側面がある。1つは、資本に包摂され、強蓄積の基盤になっていく側面と、もう1つは、労働の社会化ということである。労働の社会化は、農民の小所有意識、小

経営意識、孤立分散性、閉鎖性を克服していく物質的基盤であり、より積極的に、社会的知見の拡大、近代科学の応用、資本に抵抗する力を成長させていく。これらの諸能力の形成は、農村における新しい住民自治の担い手形成にもなっていく。

国独資の教育機能として、行政機関の教育事業が、農民に対して積極的に行なわれているが、その教育事業は、従前の公民館を通しての社会教育行政の行うものばかりでなく、農業改良普及事業、農業後継者教育、職業訓練、安全衛生教育等々、労働、農林等の行政機関で積極的に行なわれているのである。

労働の社会化という歴史的進歩性は、行政の実施する教育事業を農民の主体形成の場へ転化できうる可能性の基盤になる。主体形成の場へ転化できうる可能性を現実化させるのは、農民の自治能力の形成にかかっている。

## 序 章

### 第一節 農民の貧困化と生活学習

資本主義的生産関係が農業、農民をとらえていくのは、村落共同体と、個別の小農経営、農民的土地所有、農民的家族労働の解体過程である。そこでは、生産と消費、労働と生活の分離過程として、農業、農民が市品市場へ包摂されていくことである。

「小農民を賃金労働者に転化させ、彼らの生活手段と労働手段を資本の物的要素に転化させる諸事件は、同時に資本のためにその国内市場をつくりだすのである。以前は、農家は生産手段や原料を生産し加工してあとからその大部分を自分で消費していた。これらの原料や生活手段は今では商品になっている。」注（1）

農民の賃労働者化は、農民の労働力再生産にとって、労賃の占める比率を高くしている。そこで労働力市場の不安定性と低賃金は、農民の生活問題の側面をより一層強くしている。

「農民層の分解は、資本主義のための国内市場をつくりだす。市場形成は消費資料によつておこる。農村プロレタリアートは中農層とくらべてより少なく消費し、しかもより品質の悪い生産物…を消費するが、しかしより強く購入する。」注（2）

一方、農業の近代化、経営規模の拡大は、自己蓄積の基盤ではなく制度、系統金融によつて機械、施設の導入をしている。

さらに、この近代化、規模の拡大は、個別経営における家族労働の限界を越えての労働強化になっている。

「都市工業の場合と同様に、現代の農業では労働の生産力の上昇と流動化の増進とは、労働力そのものの荒廃と病弱とによつてあがなわれる。」注（3）

この農業の近代化、規模の拡大は、農民の健康問題や新たな家族問題等の生活問題を作り出していく。

現段階における農民の生活問題は、国独資による農民的経営の収奪と農家労働力の包摂過程で起きている。農業の近代化、規模の拡大は、国独資の強蓄積構造の中に位置している。

農民の賃労働収入の依存の拡大は、農民的農業経営の危機の問題ばかりでなく、農家の生活様式の変化によって作りだされている。

いわゆる「高度経済成長」による「消費革命」は、農家の生活様式を自給的性格のものを一層解体した。さらに、自給的性格と深く結びついていた農村の閉鎖性、保守性、家父長制などの生活意識を大きく変化させた。そこでは、伝統的生活慣習から資本によって作りだされた大量消費生活となっていった。農民の生活の中には、耐久消費材の普及、燃料の石油化、食生活物質の購入、住宅の新築、自家用車の購入となったのである。

農民経済は、生産財、消費材の二側面から深く独占の市品市場に編成されたのである。伝統的な自然循環を利用した農法や伝統的な自給自足的な食生活、「共同労働」の慣行は、破壊されていった。

農業の近代化、機械化及び消費生活の近代化それ自体は否定されるものでないことはいうまでもない。さらに、農民の労働の社会的評価は、これらの近代化の中で進行していることも事実であり、従前の無償的労働の側面も克服してきているのである。

しかし、近代化、労働の社会的評価の高まりが、独占の市場編成の中に深くまきこまれて展開しているため、農業経営の破壊、農民の欲望水準の一方的、奇形化上昇となって進行するのである。現段階の農民の賃労働者化は、農民層内部の自由競争による下層の駆逐としてでなく、独占の市場編成によって分解しているのである。したがって、農業の近代化、機械化、農民の社会的欲望水準の向上が農民の賃労働者化より先行して現われる。この賃労働者化の形態は、農業の所得上昇の志向をもつ農民層を中心にして現われている。

農民の社会的欲望水準の向上は、主に、都市の近代的労働者を媒介として形成される以上に、独占の価値実現の論理としての市場編成によって作りだされたものである。

「農民的労働の社会的評価の高まり、あるいは、農民家計（消費構造）の身分的制約の撤廃とその下限水準の上昇（生活水準の上昇）は一方では農地改革の所産であり、一定の範囲で戦後の民主化（農地解放）を反映するものであった。……日本資本主義の再編（蓄積運動の軌道設定）を通して、そのような成果自体つぎの段階では資本蓄積の機構に組み込まれ、反対物に転化せざるをえない矛盾を内包してくる。これにより農民労働の社会的評価の高まりや生活水準の上昇は、単にそれに留ることなく農民労働力をより深く資本のもとに駆りたてていく蓄積メカニズムに転化し、それとして作用せざるをえなくされてきているのである。」注（4）

日本においては、歴史的に、独立自営農民の存在がなかったが、戦後の農地改革によって不徹底ながら農民的土地所有による農民的経営が生まれた。しかし、それは、農業と工業の著しい不均等発展のもとで、独占の収奪と蓄積条件によって独立して存在する条件がなかったことはいうまでもない。つまり、そこでは、市場価格が彼の生産物の価値または生産価格まで上がる必要がないので

ある。独占による農民的経営に対する戦後の市場編成は、生産価格までもいたらない農産物の市場価格を形成し、さらに、生産財、消費材の独占価格、インフレーション、金利等によって収奪されている。

以上の国独資の市場編成の中で、農民の社会的欲望水準向上の一面化、奇形化が進行したのである。その一面的、奇形化は、次のような農民生活様式の貧困化に現われている。

まず第一には、農村における共同消費手段の絶対的貧困である。それらは、無医村地区の激増、道路の未整備、保育所の不備、学校施設の不備、通学距離の延長、公民館の集中施設化など農村生活の共同施設的な不足があらゆる面に現われる。この農村の共同消費手段の不足は、過疎化現象による地域生活破壊と部落の「共同体」的な互助的機能の解体の中で進行している。そこでは農村住民の今まで経験したことのない新たな生活環境の悪化がある。この矛盾の集中的な現われとして、農村の老人問題がある。

第二には、農婦症、農業機械災害、農薬、畜産団地化の公害、出稼ぎの人身事故等、農民の安全労働と健康問題の深刻化である。それらの問題は、農家婦人を中心にして農民の全家族員におしよせている。

第三には、住宅の増改築、耐久消費材、乗用車などの普及などによる家計費の増大とインスタント食品の普及にみられる食生活の簡素化、出稼ぎ先での飯場生活等過少消費の構造の進行である。ここには、大量消費と過少消費の同時進行がみられ、限界状況までの労働強化と日常生活費の極端なきりつめによって、住宅の増改築、耐久消費材の普及が行なわれている。

小農の貧困化による労働強化は、一般的に指摘されるところである。レーニンは、「農業における資本主義」の中で、この問題について次のように述べている。

「小農は、1日に12時間はおろか、14時間も働けるし、現に働いている。そして、標準よりもはるかに急速にその神経や筋肉をつかれはてさせてしまうほど、標準以上に緊張して働きうるし、現に働いている。」注（5）

農民の社会的欲望水準向上の一面化、奇形化は、農村文化、農民の精神生活をも破壊していく。生活様式は、生活慣習や文化水準に規定され、人間の精神生活に深くかかわっている。

農業生産力の発展において、農民の営農意欲の問題は、決定的に重要である。ところが、農民の社会的欲望水準の一面的、奇形的向上は、農民の主体的な営農意欲さえも阻害している。農民の貧困化は、農民的農法、伝統的生活様式を破壊し、精神的生活のうるおいを奪っていく。とくに、農民にとって、自分の土地で、家族とともに、他人にきがねせず、自由に農業経営する喜びは大きい。

ところで、宮原誠一氏は、営農の意欲の問題を農民の視野の拡大、人間的、知的たくましさの原点として重要視している。

「意欲的、積極的に営農にうちこんでいる青年たちのじっさいは、どうであろうか。……かれらの多くは、まよい、なやんだあげくに、農業をえらびとったのである。やろうとおもえばやれなく

はない離農、離村と天秤にかけて、農業をえらびとったのであり、ひろい視野に立ち、青年らしく想像と構想をめぐらすことをとおして、その選択はおこなわれたのである。……いま農業をやっている生きのいい青年たちは、都会に出てどこへいっても、りっぱに一本立ちできる人間的、知的なたくましさをもった青年である。』注（6）

農業をえらびとった農業青年について、その青年が、自分の農業経営、土地所有、労働力の基盤と無関係に存在しているのでは決してない。農業に意欲をもやして農業選択を行なった青年の多くは、農業で生きていけるだけの可能な土地所有と農業経営の物質的基盤が必要であり、青年の悩みは、意識の問題からだけではない。もちろん、上層農家の青年層においても広範に農業を継がない青年が現われており、物質的基盤のみで農業選択の問題を考えるのは、大きな誤りであることはいうまでもない。とくに、そこでは、青年の職業、人生の価値観が大きく作用しているからである。

没落しつつある小農は、より一層自からの農民的土地所有、農民的経営を維持しようと必死の努力を行なう。これは、小農民の所有意識のためである。エンゲルスは、「フランスとドイツ農民問題」の中で、この問題を次のようにのべている。

「彼の血肉にしみこんだ所有意識のために、……彼のあやうくされた猫のひたいほどの土地の維持のための闘いが困難になればなるほど、彼はますますがむしゃらな絶望をもってそれにしがみつき、それだけにいよいよ、全社会への土地所有の引き渡しをうんぬんする社会民主主義者を、高利貸や弁護士と同じような危険な敵と見るようになる。」（注7）

ところで、農民の所有意識から作りだされる幻想的な偏見を克服していく課題をマルクスは、次のようにのべている。

「農民の収奪……彼らの農村プロレタリアートへの転落とは、日常の事実である。だから、農民をプロレタリアートから区別するものは、もはや農民の現実の利益ではなく、その幻想的な偏見である。……農民の名目的な土地所有を彼ら自身の労働の果実の真の所有に転化することができ、真の独立生産者としての農民の地位を破壊することなしに、近代農学の恩恵—社会的必要によって要請されたものでありながら、現在では、敵対的な力として日々に農民を侵害しているところの一に農民をあずからせることのできる唯一の政府形態である。』注（8）

没落しつつある小農民が、その所有意識にしがみつき、幻想的偏見を根深くもっていることは、農民的所有、農民的経営を防衛していく意味での生産学習の重要性をもっている。この生産学習は、農民の幻想的偏見を克服していくものであり、農民の貧困化による生活問題と結びついての学習が要求されている。ここに、生産学習より生活学習への発展が導き出されてくる。この生活学習とは、農業の生産力形成ばかりでなく、農民のあらゆる生活過程に即して、貧困化に対応する学習課題をみいだしていくことである。

この生活学習とは、農民の賃労働者化にともなう生活問題の労働者のとらえ方による農民意識の克服学習でもある。

